

◆ ニュースレター おおば ◆

平成29年2月号

テーマ『バーニー・サンダース自伝』

○：アメリカ大統領にトランプ氏が就任した。番狂わせと言われる選挙結果の上に、どんな政策を实行するのか、世界が注目している。早速、様々な混乱が生じているが、ここで取り上げるのは、民主党からの候補者指名をめぐって、最有力候補のヒラリー・クリントン女史と激しい接戦を繰り広げたバーニー・サンダース氏だ。最終的に指名を得るまでは行かなかったが、若者の圧倒的支持を受けたことに興味を持った。バーニー・サンダース著、萩原伸次郎監訳、大月書店刊。

○：氏は1941年ニューヨーク生まれ、シカゴ大学卒業。1981年から89年までヴァーモント州バーリントン市長。1991年から2007年合衆国下院議員。2007年から合衆国上院議員。1979年から2015年まで、政党に属さず無所属。2015年から民主党党员。民主的社會主義者として「政治革命」を呼

びかける、既成の政治から外れた「はぐれ者」が、大統領選挙で快進撃を見せたのは何故か。それは一言でいえば、その政治姿勢が共感をよんだ。「ひと握りの金持ちや大企業の利益しか代表しない政治に対抗して、働く人々や低所得者や中間層々つまり、大多数の人々の利益のために闘うことを明確にし、そうした人々を政治のプロセスに巻き込み、大きな運動をつくって政治を変える」というものだ。

○：何も目新しい考え、主張ではない。私に言わせれば、ごく当たり前の主張だ。しかし、これを貫徹することはもの凄く難しい。「こもつともだけど出来っこない」で切り捨てられてお終いだ。サンダースが政治家としてのスタートを切った頃、ヴァーモント州はアメリカで最も共和党が強い保守的な州のひとつだったという。それが今では、社会主義者サンダ

ースが70%の得票率で圧勝する州になっているというから驚きだ。

○：もちろんトントン拍子にとが進んだわけではない。苦しい格闘の連続だ。1971年、人口62万人のヴァーモント州の最大の市、バーリントン市(人口4万人足らず)に住み始め、共和党、民主党とは比較にならない小政党、自由連合党から初めての選挙に出た時の得票率は2%だった。それが5期目の現職市長(民主党)を14票差で破って1981年バーリントン市長に当選。二大政党に反旗をひるがえして当選した全国でただ一人の市長だ。当然に市政運営は難航する。市議会13人の中で支持者は2人。それを3回再選されるに至った。

○：共和党とグルになって市政を牛耳っていた保守的な民主党との闘いで、市議会の過半数を進歩派が占めることを目指した。任期中、それは叶わなかったが、拒否

権を持つ勢力を確保し、市政は前進した。しかし、市民の支持は得ても、州議会からの支持は得られず、進歩的な市の憲章改正が州議会の承認を得られず実現しなかったことは、後の州知事選立候補の理由の一つになった。

○：地方政治のステージから中央政治を目指すのは珍しいことではない。真により良い政治の実現を目指す人と、本人の野心・満足を目指す人がいるように感じる。サンダースは前者であると、私は信じる。1986年の州知事選、1988年の合衆国下院議員選に市長在任のまま立起、落選。1989年バーリントン市長退任。1990年下院議員選挙に立起、得票率 56%で当選。40年ぶりの無所属議員となった。ヴァーモント州選出下院議員を8期務め、2007年上院議員に就任。ジョージ・W・ブッシュが2期目の再選を果たし、上下両院で共和党が多数党になった直後に、急進

的な無所属の議員が、アメリカで最も長く続く共和党の上院議席を取ったのだ。

○：本書は 2015 年に出版された「ホワイトハウスのほぐれ者」の邦訳。1997 年に出版された自伝に、新たに「まえがき」と「解説」を付け加えて再刊されたものだ。だから本文は 1997 年までの内容で、上院議員以前の話だ。だが、アメリカの主な問題として指摘している「金持ちがもつと金持ちになる一方で、他のほぼ全ての人が貧しくなっている」、「民主主義は危機に瀕し、寡頭政治が迫っている」、「私たちが知ることは、企業メディアに決められている」、「医療制度はよるめいている」、「教育制度は危機を迎えている」等々は、現在に続く大きな課題であるし、正に今の日本にとっても大きな課題であることに驚く。

○：大政党でないとは何も出来ない。草の根運動では何も変わらない。

い。そんな思い込みを、小さな市、小さな州から、アメリカ全土を巻き込む政治運動にサンダースは展開させ、多くの人々の支持を集めた。不可能ではないのだ。